



2020年（令和2年）  
5月号（No. 900）

公益社団法人  
**日本山岳会**  
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● [jac-room@jac.or.jp](mailto:jac-room@jac.or.jp)

## アルタ・ヴィア2のトレッキング

### ―「夢の国」ドロミテを満喫した14日間の山旅―

河野 長

2017年、18年のスイス・フランスに続く、河野会員によるアルプスのロング・トレッキング第3弾は、昨年歩いたイタリア・ドロミテ。奇怪な石灰岩の岩峰群が林立する山群の北西部からスタートして南下、最高峰マルモラーダを経てクローチエ・ダウネ峠に至る2週間の山旅日記と関連情報をレポートしてもらった。

2017年からスイス・アルプ

スのトレッキングを行ない、その結果を一昨年と昨年の「山」5月号に発表させていただいた。2019年はトレッキングも3年目になり、そろそろ別の所に行きたくなった。いくつか可能性を考えながら、結局、ヘルマン・ブールが「夢の国」と呼んでいたドロミテに行くことにし、具体的にはアルタ・ヴィア2（AV2）という一番長いル

ートを選んだ。

これまでと同じく8月末から9月半ばぐらいを旅行期間に選び、日本から直行便があるミュンヘンから現地に向かう。オーストリアを経由してイタリアへは電車で行った。山に取り付く前に国境を2度越えるわけだが、特に身構える必要はなく、東京から松本へ行く程度の感覚である。

## 目次

アルタ・ヴィア2のトレッキング

- ―「夢の国」ドロミテを満喫した14日間の山旅― … 1
- 登頂50年を迎えるエベレスト登山隊 … 5
- ぐんま県境稜線トレイルのムジナ平に避難小屋設置 … 8
- アルプスと海をつなぐ 梅海新道
- ―登山道を受け継ぐ梅海岳友会の設立― … 9
- さんけん通信 … 10
- 追悼 磯野剛太先輩を偲んで … 11
- 東西南北 … 12
- 新入会員 … 14
- 図書受入報告 … 14
- 図書紹介 … 16
- 会務報告 … 18
- ルーム日誌 … 18
- 会員異動 … 18
- INFORMATION … 19
- 編集後記 … 19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間  
月・火・木 … 10~20時  
水・金 … 13~20時  
第2、第4土曜日 … 閉室  
第1、第3、第5土曜日 … 10~18時

### ブレッサノネからマルモラーダへ (第1日~第6日)

8月26日、昼ごろにブレッサノネに着いてすぐ歩き出す。初日はプロローゼ小屋泊まりで、そこまではまだなだらかだ。27日にはプテニア峠という大きな峠を経由してジェノバ小屋に着く。だんだんと山の中らしくなる。28日のニヴェス峠の登りに、初めてのヴィア・フェラータ（鉄の道の意、VFと省略）があった。この日はプエス小屋まで。29日はそこからガルデナ峠を横切る。この峠の南側にセラ岩峰群があり、ドロミテらしい迫力のある光景が見られる。峠を越えてまた山の中に入ると、

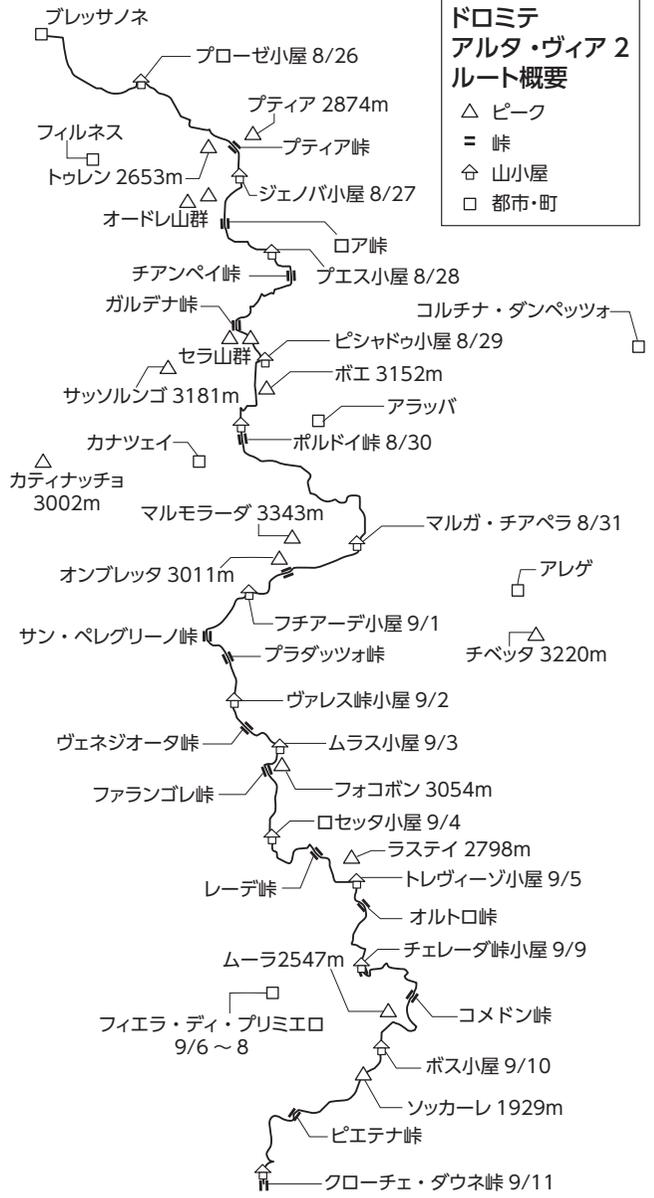
一木一草もない荒涼たる風景の中にピシヤドウ小屋があった。ここまではガイドブックに書いてあるとおり4日間で歩いた。しかし、ここから3日の行程というムラス小屋までは5日かかった。日数がかかったのは、小屋泊まりが続いたのでホテルに泊まって休みたいと、30日にポルドイ峠で泊まったためでもある。しかし、も



ファランゴレ峠への登りのVF

**ドロミテ  
アルタ・ヴィア 2  
ルート概要**

- △ ピーク
- = 峠
- 合 山小屋
- 都市・町



つと大きな理由は、次第に天候が悪化したことだ。

31日は最高峰マルモラーダ(3343m)の北面を見ながら東に向かい、フェダイア湖の岸に降りるまではなんとか持ったが、その後強い雨になったので早仕舞いして、マルガ・チアペラに泊まった。しかし、この日は午後になって天気が回復したので、ロープウェイを使ってマルモラーダ頂上まで空身で往復した。ただ、山頂は霧が懸かっている、楽しみにしていた

パノラマは見られなかったが……頂上から北側には氷河が懸かっているが、最近では急速に縮小しているようである。

**マルガ・チアペラからトレヴィーゾ小屋へ(第7日~第11日)**

9月1日は、マルガ・チアペラからマルモラーダの南面を西へ向かう。しかし、午後には雨が降り出したので、サン・ペレグリーノ峠より手前のフチアーデ小屋で泊まる。2日は朝から雨になったが、

ルートが難しいヴァレス峠の小屋まで歩いた。そこから先はVFの場所が多くなり、雨の中では危険だ。幸いにも翌日から天候が回復し、しばらく晴天が続いた。

**3日は晴天でVFも余裕を持って通過し、ムラス小屋へ。小屋に着いたのが早い時間だったので、1時間ほどかけてムラス(2906m)に登る。この山頂からは、素晴らしい岩峰群が間近に見えたが、**

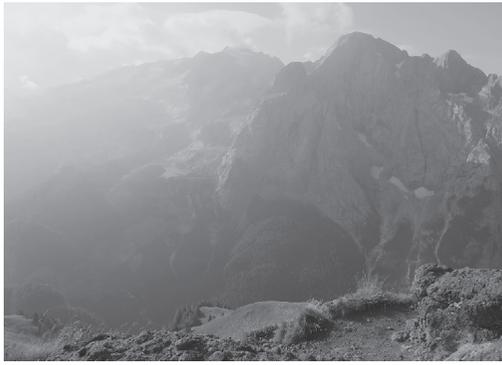
フォコボン(3054m)やブレロニ(3130m)といった山々であ

る。垂直な岩峰が立ち並ぶのは、ドロミテならではの風景と言ってよいだろう。

4日は急斜面のトラバースやジグザグの登りの後、かなり長い急峻な区間を経てファランゴレ峠に達する。この峠はフォコボンから連なる岩峰群の中の狭い割れ目のような所で、全行程の中でもハイライトと言つてよい。VFの設備なしにはとても登れない所を、滑落などしないよう、慎重に時間をかけて通過する。峠を越えた後も困難な場所が続くが、最後はアルトピアノの緩やかな斜面を登つてロセッタ小屋に到着した。前日と同様にロセッタ(2743m)の頂上に30分ほどで登る。ここではパラ・デイ・サンマルティノ2(2982m)の岩壁が圧倒的である。

**5日はロセッタ小屋からトレヴィーゾ小屋まで。これもルートの難しさは続くが、ファランゴレ峠を考えればずっと楽である。**

ファイエラ・ディ・プリミエロからクローチェ・ダウネ峠へ(第12日~第14日)  
ここまでは好天気にも恵まれたが、翌日から3日間の予報は最悪であ



最高峰マルモラーダ(左)とグラン・ヴェルネル

る。この先もVFの区間が続くので、ヴァレス峠のときのように、半日だけでも進むといったことはできそうにない。いろいろ考えた結果、下界に降りて過ごすことにした。翌朝、小雨の中を1時間ほど下ってから、バスでフィエラ・デイ・プリミエロに出た。3日間は降り込められたが、傘を差して町を歩き回るぐらいのことはできたので、まあひどく退屈することもなかった。3日目の夕方にはバスの終点まで戻って泊まり、縦走の最後の区間に備えた。

9日はトレヴィーゾ小屋近くからチェレーダ峠まで。予報どおり天気は回復し、すがすがしい気分

で歩ける。これまでと違い、稜線を巻かずにそのまま登ることが多いが、このあたりから全体の高度が低くなり、旅の終わりを予感させる。翌日のボス小屋までの行程は1日分としてはこれまでで一番長い。小屋の人と交渉して朝食を早くしてもらい、7時には出発した。高度は低くなったが、ルートの難しさは相変わらずで、VFもあちこちにある。夕方の5時にボス小屋に着くことができた。

11日はボス小屋からさらに長距離を進む。ガイドブックで泊まることになっているダルピア小屋には3時過ぎに着いたが、そのまま進み、2日分を歩き通して午後6時半にクローチェ・ダウネ峠に到着。これでアルタ・ヴィア2の全行程が終了した。

### ドロミテとヴィア・フェラータ

ドロミテ山群は、イタリア北部のオーストリアとの国境に近い所にある。この地域は南チロルと呼ばれ、かつてはオーストリア・ハンガリー帝国に属していたが、第1次世界大戦の結果、イタリア領となった。このためドイツ語を話す住民が多く、有名なラインホ

ルト・メスナーも、ブレッサノネに近いフーネス(ドイツ語名フィルネス)という小さな村の出身である。こうした地域なので、地名や小屋の名前もドイツ語とイタリア語の両方があるのが普通である。本稿では、なるべくイタリア語の名前に統一した。

スイス・アルプスが主に花崗岩によって構成されているのに対し、ドロミテではマグネシウム質石灰岩(ドロマイト)が主要な岩石である。また、スイスの山岳景観は主に氷河の浸食によって造られたものだが、ドロミテは最高峰のマルモラーダでも3343mの高さなので、氷河はほとんどない。しかし、石灰岩は水による浸食を受けやすく、その結果、垂直に近い大岩壁を形成することがしばしばある。浸食で削られた岩屑は山と山の間を埋めるが、この地形をえぐるような大きな川がほとんどない。その結果、高地には比較的平坦な堆積地形(アルトピアーノ)が保たれ、そこから突然、大岩壁が立ち上がるといって、ドロミテに独特の景観が造られている。

ドロミテのルートは、スイスでのように峠への登り降りを繰り返

すのではなく、アルトピアーノの上をなるべく平坦に進もうとトラバースが多く、日本の縦走と似ている。それでも急峻な所を避けられないこともあり、岩登りの要素が入り込んでくる。そこでVFの順番である。

ヴィア・フェラータ(VF)には本格的な岩登りルートに付けられたものもあるが、ここで述べるのは、ドロミテの縦走コースのものである。穂高岳や剣岳で難所にロープなどを張ってあるのと似ているが、実は大きな違いがある。ハインド・ホールドとしては16〜20mぐらいのワイヤロープを用い、5〜10mおきに輪付きの太い鉄釘で



ムラス頂上から見たフォコボン(中央)とカンピード。右下にファンゴレ峠



ロセッタ頂上からのパラ・ディ・サン・マルティーノと  
チマ・ディ・ヴァル・ローダ(右)

止めてある。足場がない所には、フット・ホールドとしてコの字型の金具が打ち込んである。これらの一方だけ、または両方が設置されているのが普通の形で、そのほかにハシゴなどを置いてある場合もある。

縦走路でのVFの設置には、しっかりした原則があるようだ。それは、自分の足だけでは進めない困難な場所に、三点確保を実現するために必要な最小限の設備を配置するということだ。ワイヤロープだけ張つてある場所が多いが、急な岩壁などではコの字型の金具だけということもある。これは手でもつかまれるのだから、

別途にハンド・ホールドは要らないということだろう。

VFの効果は絶大である。もし設置してなければ3級程度の岩登りとなり、よほどバランスの優れた人以外は、ロープなどを使わなければとても通れないだろう。私のように、独りで縦走するなどは論外である。ネットなどではVFについて、ハーネス、カラビナ、ヘルメットなどを必ず着用と書いてあることが多いが、どうやら縦走路トには当てはまらないようだ。基本的な三点確保が身に付いてさえいれば、特別な装備なしで十分安全に行動ができる。

### その他の情報

AV2のルートでは、ホテルがある場所は大きな道路の通る峠にほぼ限られており、結局、小屋泊まりが主になる。山小屋は個人経営のこともあるが、イタリア山岳会(CAI)の各支部が持っているものが多い。部屋は大勢と一緒に寝るドミトリーが主だが、個室を具える小屋もある。私は個室がある所ではなるべく使うことにした。ドミトリーの場合は、衛生上の理由で、各人が中に入って寝る袋を

持っていることを義務付けている。私はシュラフカバーを持って行ったが、もつと薄いものでも良い。

どの小屋でも生ビールが飲めるし、食事には相当力を入れているようで、おいしいものが食べられる。宿泊は1泊朝食付きの料金が25〜45€、夕食はビールを別として20〜25€といったところである(当時は1€が120円ぐらい)。

この値段は、山小屋でもホテルでもあまり変わらない。今回の旅行は山の中が14泊、途中の天気待ちが3泊、その他(ミュンヘンなどの滞在を入れて全22泊であったが、飛行機代を除いて28万円ほどの出費だった。似たような期間のアルプス・トレッキングには約40万円かかっており、スイスに比べてイタリアは物価が断然安い。

ガイドブックはGillian Price, *Trekking in the Dolomites, Cicerone, UK.*で、2016年発行の第4版で最新情報が得られる。この本にはAV2のほかにAV1の詳細も載っており、ほかのルートについても簡単な説明がある。ドロミテ全域に2万5000分の1の地図があり、[www.tabacomapp.it](http://www.tabacomapp.it) というサイトからスマホにアプ

リを入れれば見る事ができる。ただし、無料で見られるのは現在地のすぐ近所だけなので、日本では全く見られない。現地でも山中では電波が届かないのが普通だから、前もって地図を入れておく必要がある。今回の旅行には合計25枚を購入した。それでも全部で6000円程度であり、紙の地図を買うより断然便利である。

スイスとイタリアで山小屋に違いがあるとすれば、それはシニョーラの存在かもしれない。スイスの小屋が美しく整っていて高級そうなのに対し、設備の立派さで負けているわけではないが、イタリアの方が人臭く、特に女主人の存在が際立つ。

どの小屋でも(主人がいても)シニョーラが一番の中心であって、旅行者のいろいろな望みに親身になって対応してくれる。英語がうまくない人もいるが、そんなことは問題ではない。身振り手振りで問題を理解し、的確に解決法を考えてくれるのである。こういう人情を感じられる点では、イタリアと日本は似ているかもしれない。山だけに限らない、ドロミテの魅力と言えるだろう。

## 登頂50年を迎えるエベレスト登山隊

神崎忠男

## 世界で6番目の登頂国に

今からちょうど50年前の1970（昭和45）年5月10日9時10分、日本山岳会エベレスト登山隊の松浦輝夫、植村直己の両隊員は、世界最高峰エベレスト（8848m）に初めての日本人として登頂した。

イギリス、スイス、中国、アメリカ、インドに次ぐ世界で6番目の登頂国となり、サミッターとしては25番目、26番目となった。翌11日には、平林克敏隊員とチョタレイ・シェルパが登頂した。

植村隊員はその著書『エベレストを越えて』（1982年、文藝春秋刊）の中で、最後の登頂シーンを次のように綴っている。

《頂上かと思うと、またすぐ先に高いこぶがある。ここで挫けては終わりだ。「慎重に、慎重に」と、自分では急ぎたい手と足を、必死で抑えて、ピッケルに力を入れた。

「百里の道は九十九里をもつて半ばとす」

という諺が頭に浮かんで消えた。とうとう最後のこぶが見えた。

私たちは頂上の下一〇メートルのところまで息を入れ直した。深い興奮した呼吸であった。

九時十分。

松浦さん、続いて私と、世界最高峰の頂上に立った。最終キャンプを出てから三時間経っていた。私たちはお互いに抱き合って、「やった、やった」と喜びをわかちあった。松浦さんの眼鏡の下から涙が流れている。私の頬にもとめどなく涙が伝わった。》

そして、頂上での1時間は一瞬のうちに過ぎていった。ラストランナー（サミッター）として送ってくれた皆への感謝と、湧いてくる登頂の感激を私は一生忘れないだろうと思った、とも書いています。

一方、前進ベースキャンプ（ABC）で今か今かと吉報を待つ隊員たち。松田雄一・副登攀隊長はトランシーバーを片手に右往左往、大塚博美・登攀隊長も「マメちゃん（松田隊員の愛称）、まだかね……」と落ち着かない。天気や松浦・植村両隊員の体調から判断して、間

違わなく登ってくるだろうと思いながらも、「頼むぞ、頑張ってくれ」と不安と期待の中で固唾をのむ隊員たち。

突然、頂上から「登頂成功！」の一報。トランシーバーを持つ松田さんから「着いた……」のひと声。ABCにいた隊員たちは「バンザイ、おめでとう」と声掛け合いながら大塚さんと握手、また隊員同志も抱き合って喜び合う。隊員たちは、それぞれ今日までの苦労とその成果を噛み締めていた。日本を出発したときから、今回登れなければ、諸外国の登山隊が待っているの、日本隊は登るチャンスを失うだろう。どうしても今回は登って帰らなければ、というような雰囲気使命感を感じていたことも事実だ。

また、登山隊の構成は、報道隊員は除いて学術隊員、ドクターを含めると、松方三郎隊長はじめ総勢30名。そのうち小西政継、吉川昭、伊藤礼造の3隊員は社会人クラブの所属だが、後の隊員はすべて大学山岳部の出身である。無意識ながらも自分の大学の名前を背負って健闘したのも事実だと思っ



ベースキャンプで記念写真に収まる全隊員

か、すべての隊員が十二分の活動をしたと言っても過言ではなく、今回の成功の要因になったと信じている。

この登山隊で特記すべきことは、南壁（現在は南西壁）というバリエーション・ルートからの登攀を取り入れたこと。また、女性隊員として渡部節子さんが参加、ヒマラヤ登山に新しい風を送り込んだことも書き添えておきたい。世界初の女性によるエベレスト登頂は1

975(昭和50)年の田部井淳子さんだが、もしこのとき渡部隊員が登頂していたら、登山界が変わっていたかもしれない。

## 登山隊も「ワンチーム」で

今回、登頂50周年に当たり会報「山」にスペースをいただけしたが、今の日本山岳会会員にとつて、旧き時代の過去の登山には興味も価値も感じていただけないのが現状ではないかと思う。しかし、参加させていただいた隊員としては、当時は真剣に頑張ったと自負しており、いささか自己満足になるがその想いを記させていただく。

当時の隊員の半分はすでに亡くなった。年齢の関係から特にリーダー格の隊員は、登頂者の平林克敏隊員しかお話ができない今、残された隊員として、亡くなったかった仲間のためにも彼らの努力や成果をなんらかの形で残したいと思っている。登頂者の名声は黙っていても後世まで語り伝えられるが、仲間の数人を頂上に立たせるために、ともに苦勞した隊員たちの実情はなかなか表面には出てこない。亡くなった隊員たちも、恩着せがましく「語り伝えてくれ」な

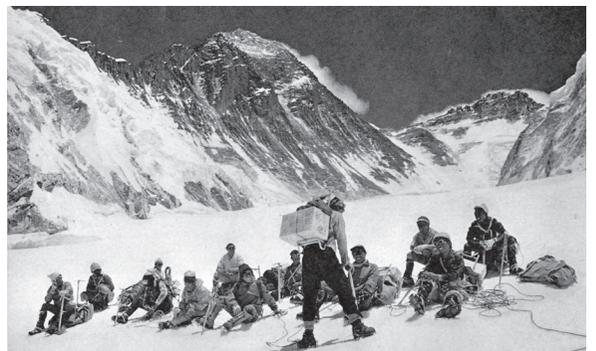
どと思う隊員はいないだろうが、残された仲間として大人しくしてゐることも、自分にはできない。

昨年のラグビー・ワールドカップでは「ワンチーム」という言葉がもてはやされたが、登山においてもチームワークなどチーム論は必要だと信じている。年間約350人も亡くなるスポーツは、登山以外にはない。極端な言い方だが、真の登山は「勝つか負けるか」などというなま易しいものではない。「死ぬか生きるか」の勝負と思つて山に向き合つてきた。

この登山隊でも、成田潔忠隊員やキクツェリン・シエルパの死、ローツェ・フェースでの平林・神崎両隊員の九死に一生を得たような滑落事故、連日の荷揚げでの疲勞、高度順応の不覚などを乗り越えた上での協力や支えがあつてこそその登頂だった。自分が当事者だから言いにくいところがあるが、登山においても、ワンチームとして皆で力を合わせてこそ成果が得られると言いたい。現地へ行かずとも、準備段階で励ましてくれたり、お手伝いいただいた関係者のことも忘れたり、無関心でいては納得がない。

登頂を終えてベースキャンプに帰ってきた松浦・植村両隊員は元気であったが、植村隊員は雪目でほとんど目を開けていられないなかで、自分たちが頂上に立てたのは皆さんのお陰で、隊員やシェルパたちの働きがあつて頂上に立てた、と繰り返し繰り返し言つていたことが、今でも強く印象的に残っている。

こう書くと「何を気障なこと言つてるの」と言う御仁もいるかと思うが、自分はこのエベレスト登山隊をはじめいくつかの登山隊に参加して、そんな育ち方をしてきてしまった。今の人たちには「何訳の分からないこと言つてるの」と言われそうだが、「より高く、より困難」を求めて、チャレンジ精神をもってパイオニアワークに勤しむところに登山の醍醐味を感じている。そして、自分なりの登山観を信念として、古い登山者氣質を持ったまま老人になつてしまったようだ。良く言えば一徹、悪く言えば頑固で、古典的な登山心情を振りかざすので「山岳原理主義者」というレッテルを貼られているが、現代の登山とどう折り合いをつけるか葛藤を感じている。



前進ベースキャンプへの荷揚げで大活躍した「担ぎ屋」部隊

## エベレスト登山隊は私の原点

このエベレスト登山隊でお世話になったことで、会員として日本山岳会のためにできることをしていこうと、今まで会員としての誇りと自信を持つて登山や登山界と向き合つてきた。時代が変わつたと云われるとそれまでだが、昨今の登山界や日本山岳会に対して愚痴や嫌み、泣き言とか不満が多くなつてきた。きちんとした会員は皆、今の日本山岳会に満足しているのだから、自分の方に非があると分かつていても、会員とし



エベレスト頂上で日の丸とネパール国旗を掲げる植村直己隊員

ての自分のDNAはそう簡単には変えられない。役員の挨拶も財政の話が主で登山の話は二の次、会員増強も登山志向というより財政難対策。若返りとして、ただ数字的に年齢だけ若いということやみくもに入会させ、準会員制度を導入しても正しく運営できれば問題ないが、組織的には中途半端な印象を自分では感じている。

50年前とはいえエベレストに行かせていただいた会員としては、こんなことを書いては決まりが悪いが、歴史や実績を大事にし、伝統を重んじる古風な人生観に生き

てきた自分にとって、1970年日本山岳会エベレスト登山隊は、周りがどう思おうが、言おうが自分の登山の原点である。そして、日本山岳会の大きな実績の一つとして、伝統と格式を支えていると信じている。今日ある日本山岳会という存在は、日本山岳会会員よりも周りや国際登山界において称賛の声を多く聞く。

昨今のエベレスト登山は、テレビでも放映されているように、時としては1000人近い登山者が行列をなし、登頂待ちなどで遭難騒ぎがあるとも聞く。そんな現状のエベレスト登山に、まともに価値観を云々することができないのも事実であろう。英国山岳会が30年、7度の登山隊を派遣して8度目にやっと登頂できたという歴史は、どうなってしまうのか。また、我々エベレスト登山隊の苦労はなんだったのか、50年という節目の年に考えさせられてしまう。

私と平林隊員がローツェ・フェースで滑落した次の日に、成田潔思隊員が心臓麻痺で亡くなったときは、もう登山が中止になるのではないかと暗い雰囲気になった。さらにスキー隊のシエルパ6人

の死亡事故や当隊のシエルパの死などで隊長の心理が分からないでもなかったが、反面、不謹慎かもしれないが、隊員の間では成田隊員のためにも登って帰りたいと思う人が多かったと思う。結果的には登頂成功ですべてのことが前向きに考えられたが、報道隊員を含め総勢39名からなる大所帯の登山隊ゆえ、考え方や意見の違いがあってもおかしくない。

撤収段階に入り全員がベースキャンプに集結した夜、久しぶりにお酒が出て、お酒の力を借りてか日ごろの不満が爆発した。その様子をスキー隊のシエルパが見て、隊の報道記者にご注進した。帰国後に見せられた週刊誌の「日本山岳会登山隊殴り合いの大乱闘」という見出しの記事にはびっくりした。そのほか酒を飲み過ぎて態度の悪いシエルパと隊員の決闘事件、カトマンズへ帰る飛行機の搭乗順番騒動、帰りのキャラバンの珍道中など、公式報告書では見られない事実もあり、50年という歳月を経て懐かしく思い出される。

この1970年は、社会では赤軍派のよど号ハイジャック事件や三島由紀夫自決事件が起こった年

である。また、大阪万博が開催された年で、早速、エベレスト頂上の石を展示会場に持って行ったが、アメリカが月面着陸して持ち帰った月の石がすでに展示されていて、我々の展示は陰りぎみだった。

時代も1\$360円の時代で、ビールの大びんが140円、都パスの初乗りが40円、新聞1ヶ月分750円、国土地理院の5万分の1地図が80円だった。私は父の建築業を継ぎながら麻布でレストラン「ブリガンド」を経営、妻のお腹には3人目の子どもが宿っていた。登山隊以外にもいろいろあり、この50年が懐かしく思い出される。

もつとしっかり登山隊の報告を書かなければいけないところだが、浅学非才ゆえこのあたりで筆を擱きたい。興味ある会員の方は、エベレスト登山隊の公式報告書を見てもらうことをお勧めしたい。

現代では受けないかもしれないが、仲間が力を合わせて登頂したという、エベレスト登山隊が50年前に派遣されたことを知っていただければ幸いである。 (評議員)

〈写真はいずれも『毎日グラフ増刊 エベレスト登頂』(1970年6月、毎日新聞社刊)より〉

## ぐんま県境稜線トレイルの ムジナ平に避難小屋設置

「ぐんま県境稜線トレイル」は群馬県北部から西部にかけての県境稜線をたどるロングトレイルで、2018年8月に全線が開通した。谷川連峰を起点に、ほぼ南西方向に新潟県境から長野県境へと延び、四阿山南方の鳥居峠まで、その全長は100kmを超える。岩稜から爽快な稜線歩き、深い樹林や高原状のプロムナードなどの多彩な山岳景観に加え、トレイル沿線や麓には水上、四万、草津、万座などの名湯もあり、変化に富んだ2000m級の稜線歩きが楽しめる。

このトレイルはほぼ既存の登山道をつなぐものだが、三国峠西方の三坂峠から白砂山間のおよそ10kmの稜線には登山道がなかった。この区間は密敷をかき分けて進む、高度なルート・ファインディング能力が求められる難コースで、かつては大学のワンダーフォーゲル部などが挑んでいたが、近年では熟達者が残雪期に歩いている程度だった。

この区間に新たに道を開き、全

長100kmのロングトレイルが完成したわけだが、三国山脈の最深部に当たるこの部分は、開通後も避難小屋やエスケープ・ルートがなく、ビバーク適地、水場にも乏しいという難区間であった。全線開通後に改訂された「群馬県山のグレーディング」でも、この区間を含めた新潟県側の旧三国スキー場から入って白砂山を往復するコースは1泊以上が必要で、地図読み能力が求められるB6ランクの難所となっている。また、谷川連峰西端の三国峠方面から白砂山を経て野反湖へと抜けるにも、この区間途中でのビバークが必須であった。

ここに昨年11月、群馬県によって整備が進められていた待望の避難小屋が完成した。小屋が造られたのは、この新規開通区間のほぼ中央、セバトの頭(1890m)西方に当たるムジナ平で、座標は北緯36・7624851、東経138・7316949。水場は稜線を5分ほど群馬県側に下った所

にある。

避難小屋は鉄骨造りロフト付きの平屋建て、大きさは縦5975mm×横2975mm×高さ4680mmで、室内面積は16・67㎡ある。そのうち寝所は13・34㎡±土間3・33㎡あり、横になる形で同時に11人程度が使用可能。また、ロフト部分(3・33㎡)にも入り口があり、積雪時でも使用可能となっている。なお、天候や体調が急変したときなどの一時的な利用を想定しているため、照明器具などの電気設備やトイレ、暖房器具、寝具、食料などは具えていない。また、管理人も駐在せず、事前予約などの必要もない。



ムジナ平避難小屋の外観

避難小屋はできたが、あくまでも最低限の緊急避難的なもの。喫緊の課題解決ではあったが、トイレの設置など今後一層の充実も求められる。また、トレイル全体を見渡しても、既存の避難小屋が倒壊し使用不能な状態の野反湖西方の稜線上や、区間の長い四阿山周辺など、避難小屋が必要な区間が残されている。登山者の安全性と快適性を増し、このロングトレイルを、日本を代表する「稜線トレイル」に育てるためにも、今回の避難小屋設置を第一歩とした、さらなるコース整備が求められている。

(群馬支部事務局長 根井康雄)



同避難小屋の内観

## アルプスと海をつなぐ 梅海新道

### ― 登山道を受け継ぐ 梅海岳友会の設立 ―

越後支部 靄本修一

#### 梅海新道の開拓者とその歴史

本年4月1日、梅海新道を守る新たな山岳会として「梅海岳友会」が設立され、今シーズンから始動する。梅海新道の開祖は小野健氏（出身は福島県。2014年、81歳で死去）。小野さんは大学卒業後の1956（昭和31）年、青海町（現・糸魚川市）の黒姫山を職場とする企業に就職。彼の専門は爆薬で、石灰岩を採る鉦山技師だった。

春、黒姫山の山頂に立った小野さんは、眼前に広がる飛驒山脈北延の山並みが、日本海に連続していることを知る。「アルプスと海をつないだら面白いコースができる。いつか拓きたい」と念じ、壮大な夢の実現に向け構想を練った。当時の登山道は朝日岳まで。

小野さんは、最初に職場の仲間を募って1961（昭和36）年、「さわがに山岳会」を設立し、7名の会員でスタートする。いきなり登山道の開拓はできない。その準備として黒姫山の開拓（黒姫小屋

建設と新道開設に着手。その後、6年から本格的に新道造りを開始

まずは犬ヶ岳への道を拓く。

鋸、鉞、鎌の「ヤブ刈り三種の神器」を使い、すべて人力フル稼働の重労働。会員は皆サラリーマン。仕事以外の休日はすべてヤブ刈り作業に専念する。この時点では、小野さんの最終目標が「アルプスと海をつなぐ道」であることを、誰も知らなかった。

犬ヶ岳までが終了すると、達成感に浸る会員に向け、小野さんは「朝日岳まで道を拓きたい」と熱く語り続けた。続く68年から、犬ヶ岳より南方へのヤブ刈り作業を開始。ところが突然、小野さんは富山営林署から国有林の盗伐容疑をかけられ、出頭を命じられた。犯罪者扱いの事情聴取に耐えながら、小野さんは自分の夢の実現に仲間と無報酬・手弁当で拓いてきた経緯を訴え続けた。だが、現場は県境稜線。結果は誤伐とされ、嚴重注意と弁償金の支払いで決着。し

かも、この先の伐開申請（9種類の許可取得）に3年を要した。

伐開作業は中断したが、小野さんは中間に山小屋が必要と考え、69年、犬ヶ岳直下に梅海山荘を建てた。資材の荷揚げから建築まで、すべて会員と協力者の総力で成し遂げ、自費で賄ったのだ。70年に朝日岳の麓、吹上のコルまでを、71年6月に親不知までの伐採作業を終えて、全線が開通した。

小野さんが構想し、仲間とともに重労働に耐え、いくたびかの苦難を乗り越えた10年。ついにアルプスの高峰と標高ゼロmがつながる梅海新道（全長27km）が開通したのだ。ヒマラヤ遠征が全盛のころ、日本でも稀有な縦走路として注目された。

#### 梅海岳友会設立の経緯と趣旨

開通後の維持に終わりは無い。10年近くは、さわがに山岳会が手入れを継続したが、限界を感じた小野さんは、80年に新たな仲間を手伝いを願った。その後、現在までの間、小野さんと親交のあった仲間が核となり「ベニスアイ・カタクリクラブ」「ドンガラ山の会」「梅海岳遊同人」の3団体が分割し

て登山道を維持してきた。しかし、会員の高齢化が顕著となった。

昨春秋、代表者から「梅海新道を守る仲間を募る」と声掛けがあり、新たな若手11人が結集した。

私たちは、今日までの梅海新道に懸けられた先達の意志を受け継ぎ、これからも登山道（および山小屋）を守り、次世代につないでいく活動の推進を誓い合った。梅海新道に憧れ訪れる岳人たちに、この縦走路を存分に楽しんでもらえるよう努力していく。そして、来年6月4日は梅海新道全線開通50周年を迎える。そのため準備も一歩一歩進めていきたい。

（梅海岳友会代表）



犬ヶ岳山頂から見た梅海新道南部の稜線





磯野剛太(いその・ごうた)

会員番号8001

1954年1月24日 東京都港区生まれ  
 1973年 都立日比谷高校を経て成蹊  
 大学経済学部に入學し、山  
 岳部に入部  
 1976年 ナンダ・デヴィ縦走登山隊  
 1980年 チョモランマ北壁登山隊  
 1980年 成蹊大学マッキンリー登山  
 隊で山頂よりスキー滑降  
 1984年 カンチェンジュンガ縦走登  
 山隊で中央峰登頂  
 1985年 キレン山脈主峰登山隊  
 1988年 日本・中国・ネパール3国  
 合同チョモランマ/サガル  
 マータ登山隊  
 2020年3月11日 逝去、享年66

## 磯野剛太先輩を偲んで

熊崎和宏

早咲きの桜が蕾を膨らませ始めた  
 去る3月11日に、磯野剛太先輩  
 が逝去されたとの知らせが届き  
 ました。昨年11月にご病氣のこと  
 を聞き、お見舞いをしていたので、  
 この日が来ることを覚悟はしてい  
 ましたが、それでもいざその日が  
 来ると、気持ちの動揺を抑えるこ  
 とができませんでした。

磯野さんは、私が成蹊中学校山  
 岳部に入部した1974(昭和49)

追

OBITUARY

悼



年にはすでに大学山岳部員で、76  
 年には、日本山岳会が世界で初め  
 て7500mを超える高所での縦  
 走を成功させたナンダ・デヴィ登  
 山隊のメンバーとして活躍し、  
 『山と溪谷』誌のカラー頁に登場さ  
 れていたので、その存在がヒーロ  
 ーとして子ども心に強く焼き付け  
 られました。高校生になったある  
 日、トレーニングをしていたとき  
 に初めてお会いして、挨拶をする  
 のに緊張しなくなり、声を掛けてい  
 ただいて一日中浮かれていたこと  
 が、お付き合いの始まりでした。

それからずっと私は磯野さんの  
 背中を追い続けることとなりました。  
 80年に日本山岳会がチョモラ  
 ンマ北壁の初登攀に成功したとき  
 にも、8000mを超える超高所  
 でルートを切り開き活躍されまし  
 たが、出発前、僕ら高校生に「君た  
 ちが大学山岳部に来てくれたら、  
 一緒に海外登山をやるうぜ」と言  
 われて有頂天になりました。

大学時代には私の怪我也あり、  
 海外登山の目標は叶いませんでし  
 たが、卒業後2年目の85年に、磯  
 野さんが率いる中国・青海省の未  
 踏峰キレン山脈主峰の遠征隊に参  
 加して初登頂を果たし、その後は  
 外国人に開放されて間もない、地  
 図なき広大な周辺地域の踏査行を  
 ふたりだけで行ないました。

88年の日・中・ネ3国合同チヨ  
 モランマ交差縦走登山隊では、磯  
 野さんがネパール側日本隊登攀隊  
 長を、私が登攀隊員を務めて成功  
 できましたが、先輩の背中はまだ  
 まだ遙か遠い先にありました。

海外遠征以外でも公私ともに大  
 変お世話になりました。谷川岳に  
 ある成蹊山岳部の「虹苺寮」では数  
 え切れない日々をともに過ごし、  
 ご実家やご自宅にもお邪魔したり、

結婚に際しては仲人をお願いしま  
 した。なお、ご実家の磯野家は明  
 治屋を創業した名門ですが、市ヶ  
 谷のJACルーム図書室にある  
 「磯野計蔵文庫」は、剛太先輩の叔  
 父上、が書架を含めて寄贈された山  
 岳書のコレクションです。

90年以降は、自らの登山活動か  
 ら日本の山岳ガイドの育成・組織  
 化に軸足を移され、ガイド資格を  
 標準化して、国際山岳ガイド連盟  
 から加盟を認められるレベルに引  
 き上げることに尽力されました。

さらに、2014年に国民の祝  
 日として認められた「山の日」の制  
 定にも、全国協議会の代表者とし  
 てその豊富な人脈を活かし、抜群  
 の行動力で政府や行政などに働き  
 掛け、その実現を推進されました。  
 「熊ちゃん」は家族みたいなものだ  
 から、おふくろのそばにいてやつ  
 て」とお兄様におっしゃっていた  
 だき、妻とともに参列を許された  
 密葬には、天皇・皇后両陛下から  
 哀悼の言葉が届けられました。  
 ここに心からご冥福をお祈りす  
 るとともに、磯野先輩の遺志をし  
 っかり受け継いで、後に続く成蹊  
 岳人の育成に尽力しなくては、と  
 いう想いを新たにします次第です。

N  
—  
東 西 北  
—  
南 南 南  
—  
S

きりえ作品で山を語る

東山一勇氣

山へは日常生活を離れ、新鮮な自然との出会いを求めて出掛ける。独学で「きりえ」を始め40年。海外の様々な国や日本の各地を訪れ、そこで出会ったインパクトある魅力的な山や風景を作品にしてきた。訪れたのはヨーロッパ、北アメリカ、オセアニア、アジア、日本。ここでは、その代表的なきりえ作品5点を選び、デザインや作風、和紙の使い方を紹介する（カラーでお見せできないのが残念）。

ドライチンネ

イタリアのドライチンネは、ドロミテを代表する景観だ。かつて海底で生物の死骸が堆積してできた石灰岩の山々、エーデルワイスなど高山植物、流れる雲はきりえ

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

作品らしく構図を考えた。山小屋に向かう登山者、山や高原は黄色や緑の和紙を使った。



ツエルマツト

スイス・ツエルマツトの夏。お

花畑からカラフルな帽子を被る3人の山ガールが木立を額にしてマッターホルンを仰いでいる。高原には仲の良い夫婦の登山者、奥の雪渓の薄青はグラデーシオン和紙

を千切って表現した。空のブルーが印象的だった。



クレイドル・マウンテン

オーストラリア・タスマニア島の中心にあるクレイドル・マウンテン。山頂（1545m）は右端だ。



日本山岳会公募登山で登った。山の形状が揺りかご（クレイドル）に似ていることからこの名称がある。玄武岩の山と高原、流れる雲の表現は苦労した。山肌は黄色のグラデーシオン和紙を使った。

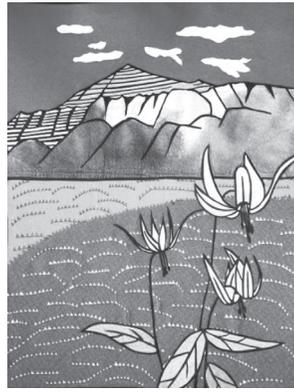
上高地

上高地帝国ホテルは、穂高連峰を背にして立つ、日本最初の山岳リゾートホテル。深紅の三角屋根、丸太小屋風（シャレー風）の壁、標高1500mの森、それぞれのイメージをデザイン。赤を基調に屋根と丸太を表現。壁の石部分はモノトーン、穂高連峰に懸かる雲はブルーの和紙と白のデザイン紙を千切って表現した。登山客をデザインすることで、山岳リゾートホテルらしく表現できた。



## 武甲山

埼玉県・武甲山。秩父の名山は石灰岩が採掘され、山頂が削られた悲しい歴史を持つ。今も麓で採掘は続けられている。産業による自然破壊で自然が失われた山。可憐なカタクリや芝桜を前面に、色彩はピンクや紫、流れる雲は白い和紙を千切り、明るい春をデザインした。



数多くの作品の中から93点を掲載した作品集『The Joy of Life in the World of Kirie (Paper Cutting) -Collection of Works-「きりえ」で至福の人生』(B5判 カラー 英和表記 127ページ AMAZONネット書店)を出版。山関係は19点を掲載。JACRルームに寄贈してあるので見てほしい。

近代登山の聖地  
横浜市山王山

小原茂延

小島久太(烏水)の一家が四国・高松を離れ、東京・神田でわずか過ぎた後、父寛信が横浜税関に職を得たことから、横浜市西戸部の通称山王山と呼ばれる地の税関官舎に移り住んだのは明治8年、烏水2歳のとき。爾来、周辺を何度か転居しながらも滞米時代を挟んで50余年の長きにわたり居住した土地である。少年のころより富士山や箱根、丹沢の山々を仰いで過ごしたと述懐している。

その烏水宅を訪れた人々のうち、山に関係する群像を拾うと、まず岡野金次郎が挙げられるだろう。明治27年の徴兵検査でともに丙種不合格だったことから知り合い、お互いに山歩きや芝居、浮世絵などの趣味を持つていることが分かり親交を結ぶ。やがて岡野の案内で丹沢など近辺の登山を始め、乗鞍岳に登るまでとなり、そこで望んだ槍ヶ岳(その前に稲倉峠から視認)こそ目指すべき山であるとして、明治35年8月に白骨から霞

沢を経て神河内に至り、槍ヶ岳登山頂を果たし、のちに槍ヶ岳を「近代登山発祥の山」としている。そのころ、同じ西戸部に住む山崎小二(紫紅)とも知り合つて八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳への山行をともにした。その途次、甲州台ヶ原で昼餐の後に発念し、書き留めたのが「山を讀する文」だ。

小島烏水が明治37年にウエストンの「北岳登山記」を翻案した「甲斐の白峰」を雑誌『太陽』に発表したことから、武田久吉ら日本博物学会同志会の注目を集め、武田が偶然、山崎紫紅に小島烏水のことを尋ね、明治38年2月、武田久吉・高野鷹蔵が山王山の烏水宅を訪問するに至ったのである。前後して志賀重昂の助言を受けた新潟の豪農で愛山家である高頭仁兵衛が『日本山嶽誌』の原稿の山を携えて山王山に來たり、それ以前に先の岡野金次郎がW・ウエストンの著書を発見していたことと相俟つて、ここに日本山岳会結成の芽が兆し、ウエストン師の強い勧めもあつて英国のアルパイン・クラブに倣い、明治38年10月14日の山岳会結成の夜を迎えた。

それはひとつ当会の創立に関する

ものだけでなく、広く我が国登山界における近代登山の黎明であり、その意味からも横浜市山王山は「近代登山の聖地」と呼ばれるのにふさわしい土地である。山岳会の創立間もないころ、山王山を訪れた中で特異な人物に荻野音松がいる。明治39年8月に「駿州田代山奥横断」踏破、悪沢岳の名をもたらした報告者であり、日本橋本町に住む若者で、風貌はまだ子どもおつかの侘わびであったという。明治42年夏に高頭、高野らとの赤石岳縦断行がその事実を確認したが、烏水からのその報に接することなく荻野は天逝(27歳)していた。その赤石岳縦断山行に途中まで加わっていた茨木猪之吉は西戸部近辺に住んでおり、烏水が茨木の養父と知り合つたという出会いだった。

このように、山王山の烏水旧居には近代登山の先駆けとなった大先達若き日に訪れ、日本山岳会が創立される上で重要な場所となつたのである。現在、烏水旧居付近に小さな公園がある。その地に近代アルピニズムの聖地としてのささやかなモニュメントができていものか、会員の浄財と地域住民への啓蒙、行政などへの働きかけ

---

 図書受入報告(2020年4月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
日本山岳画協会(編)	山に魅せられた画家達:日本山岳画協会創立85周年記念画文集	132p/21cm	日本山岳画協会	2020	発行者寄贈
プラネットライツ(編)	高野山の誕生(「時空旅人」Vol.55):弘法大師空海が見守る霊峰への旅	120p/29cm	三栄	2020	編者寄贈
宮津洸太郎(編)	チャムラン登山隊2018報告書:日本山岳会 青年部	52p/30p	日本山岳会青年部	2020	発行者寄贈
辰野勇	モンベルの原点、山の美学 /のこす言葉シリーズ	130p/18cm	平凡社	2020	出版社寄贈
五十嶋一晃	類例のない伊藤孝一の登山	350p/21cm	五十嶋商事	2020	著者寄贈
菊地敏之(編著)	関東周辺 マルチピッチルートスーパーガイド /クラミング・ガイドブックス	151p/21cm	白山書房	2020	出版社寄贈
新潟県山岳協会(監修)	新潟100名山+10	264p/21cm	新潟日報事業社	2020	監修者寄贈
清水和男(編)	青い山脈の足跡:山歩集団 青い山脈 設立30周年記念誌	179p/26cm	山歩集団 青い山脈	2018	高澤光雄氏寄贈
高山芳治(編)	ぼろしり:苫小牧山岳会創立50周年記念誌	171p/30cm	苫小牧山岳会	2004	高澤光雄氏寄贈
小出博行・小出和子	ふたりの山歩き	168p/22cm	葦書房	2001	著者寄贈

により、近き将来、「記念碑の建立」が実現することを願ってやまない。

## 今は我慢のとき

池本順平

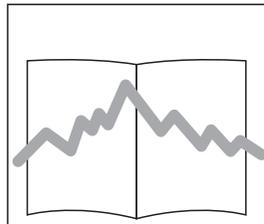
里桜舞い 花も終わりの時季ときを告ぐ 令和二年に愛でる人なく

——春の祭礼には、大正期スペイン風邪以来の疫病退散の祈りが上げられた!! 人の営みは見えない影に怯えて家にこもり、変わらぬ咲き誇る花の移ろいに気づかぬ日々を送る。——

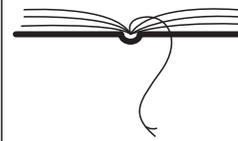
登山自粛の要請が入った。濃厚接触状態で宿泊し、感染拡散する危険性を考えれば山小屋閉鎖は当然の処置だろう。それでも、登山依存症? の面々は静かで良いとテント担いで山に向かうだろう。中高年の登山者はまず家族が止めるだろう。連絡先の所属山岳会ではこの時期やめろと言うだろう。心配なのは定着した登山届を煩わしく考え、無届け登山に走る者が増えはしないかと思えることだ。やめなさい、単独行・無届け登山・自信過剰は!!

山屋を自任するあなたがこの時期に遭難したら、世の人は山を愛する人すべてを非難するだろう。どうしても山に入りたければ登山計画書(届)を見直し、登山口に投函するのを忘れるなど警告する。残雪期の締まった雪面にアイゼンを蹴込みながら登る、待ち受ける頂には銀色に輝く眺望が待つ。この山の魅力は想うだけで心震えるものがある。貴方なら分かっているだろう、この魅力に伴う危険性の高さを。滑落遭難すれば捜索、救助隊が出る。今年の救助隊には二重遭難の危険性が絶えず付きま

う。もし遭難者が新型コロナウイルス陽性者であれば、捜索隊員すべてに高い確率で感染者が出る。出れば、その地域における救助活動はストップするのだ。



## 図書紹介



伊藤精一著

俺のアラスカ——伝説の「日  
本人トラッパー」が語る狩  
猟生活



俺のアラスカ  
伝説の「日本人トラッパー」  
が語る狩猟生活  
伊藤精一  
2020年1月  
作品社  
四六判268頁  
定価 2200円+税

「アラスカには、若いころに行くな」という格言めいた言葉がある。多感な青年時代、アラスカの広大な自然に刺激が強過ぎて、人生観がガラッと変わってしまうことがあるからだという。もちろん、み

今出ているのは、登山完全自粛要請だ！悪天時に引き返す勇気が、家を出る逸る気持ちは止める勇気に求められている。一日も早く終息することを願う待とう。

ずみずしい若い感性のもとで、アラスカの洗礼を受けることの大切さを説いた逆説的な表現である。

この本の著者である伊藤精一氏もまた、そんな「アラスカ・フリーク」の一人だった。1940年東京生まれの「オレ」は、サラリーマン生活を送りながら、どこかしつくりしない感覚にとらわれていた。30歳を過ぎて最後のチャンスと想ってアラスカに渡ったというが、ぎりぎりのところで間に合ったこととなる。70年代前半のアラスカは、石油パイプラインの工事がまだ始まる前で、それこそ手つかずの豊かな自然が至る所に残されていた「ラスト・フロンティア」だっ

たからである。私も後年、アラスカの北極圏に数回旅をする幸運に恵まれたが、当時でさえ小型飛行機から見た光景は、眼下に広がるツンドラと蛇行する大河が延々と続き、まさに原生の自然そのものだった。

本書は、その「オレ」、伊藤精一氏が罾猟で生計を支えた30年を振り返った体験記である。先住民から広大なトラップライン（罾猟場）を譲り受け、彼らの生息領域に罾を仕掛け、採集するプロの「トラッパー」となる。鋼鉄の強力な罾で、60kgもある巨大なオオカミと対決したり、ビーバーやグズリ（アナグマのような動物）に苦勞して罾を仕掛け捕獲する話は、一種の活劇のようでもあり愉快だ。クロクマやムースなどの大型獣の捕獲となると、ときに死と隣合わせの対決になることもあるという。

だが、この本の真骨頂は罾猟や狩猟にあるのではない。「オレ」の破天荒な生き方とアラスカの隣人たちが実に魅力的に描かれて、語りのおもしろさに引き込まれるところにある。当時の人々の暮らしぶりや変わりものの友人たち、ブッシュ・パイロットたちとの交流

などが生き生きと描かれ、興味が尽きない。ときに「ダーリン」とか「バリバリバリ」という擬音が気になることもあるが、膨大な量のテープを起こし、語りを整理し、編集した編者の労苦は大変なものだったと思われる。そうした舞台裏を感じさせない仕上がりもまた好感が持てる。

後世に語り継ぐことの大切さをさりげなく教えてくれる一冊と言えよう。  
(神長幹雄)

羽根田 治著

十大事故から読み解く山岳  
遭難の傷痕



十大事故から読み解く  
山岳遭難の傷痕  
羽根田 治  
2020年2月  
山谷社  
山と六判400頁  
定価 1700円+税

山岳遭難に関しての著作オーストリタイーと言ってもよい羽根田治氏による最新の書き下ろしである。今回注目されるのは、近年の遭難事故を扱うのではなく、山をやっている者なら少なからず「ああ、あの事故」と思い浮かべることので

きる、かつての記憶に残る十大事故を取り上げ、その詳細を改めて調べ上げ検証している点で、これまでの著書と一線を画している。

さて、本書ではたとえば「木曾駒ヶ岳の学校集団登山事故」、「谷川岳の宙吊り事故」、「愛知大学山岳部の大量遭難事故」、「吾妻連峰のスキーツアー遭難事故」、また最後にはまだ記憶に新しい「トムラウシ山のツアー登山遭難事故」などが取り上げられているが、そうした遭難事故があつたことはおおよそ知っているつもりでも、では実際にそれがどんな事故だったのか？と改めて問われても、具体的にはよく分からないのが現状である。著者もそうした過去の大きな遭難事故の詳細が気になり調べ始めたのが、そもそもの執筆のきっかけだったと言う。

著者自身が「あとがき」で記しているように、今回取り上げた事故に関しては、これまで行なってきたような検証作業、つまり「事故の当事者および救助隊員などの関係者に会って話を聞き、それを整理してまとめるという形」が通用しない。そのために著者は過去の文献を可能な限り集め、読み込むと

いう検証作業をとつたのだが、その作業に「一役（実際はそれ以上）買ったのが日本山岳会の図書室であつたとも明記されている。「もし日本山岳会の図書室がなかったら、おそらく本書は世に出ていなかっただろう」と。おそらく山岳関係に限れば国内でも屈指の資料を有している日本山岳会の図書室を、このような形で評価してもらえたことに感謝するとともに、誇りに思う。

前記のような方法で熱心に調べ上げられたそれぞれの事故の詳細を読めば、なんとなくくだった記憶が、改めて「実際はそうだったのか」と気付かされる。どの件についても読み進める手が止まらないほどの吸引力があるのも、綿密に資料を漁り、調べ、まとめ上げている著者の構成員のほか、文の持つ力に拠るところが大きいだろう。

そこには遭難という落とし穴に、今だから言える「たら・れば」が背景に散見され、そうした「どうしてこのときに○○しなかったのか……」「あるいは○○をしていれば助かったのに……」という無念、やるせなさが繰り返し読む者に突

きつけられる。そして一見どうということもないような判断のミス、思い込み、また考えのなさが、命取りにつながる岐路であることを教えてくれている。

本書はそうした岐路での誤りを防ぐために、現実を客観的かつ丁寧調べ、説得力ある言葉で読む者に意識を喚起していると同時に、多くの人の記憶に残る山岳遭難を今という時代の中で捉え直して、意義深い一冊であると思われる。（中村好至恵）

## 旅客機から見る日本の名山

須藤 茂著



2019年11月 出版  
イカロス B5版186ページ  
定価 1727円+税

私が地図を大好きになったのは、小学2年のときに担任の先生から、全国道路地図をいただいたからだった。小学生が見るには分厚い、字も小さな道路地図であつたが、学校から帰っては道路地図を眺め、

そのうちに覚えた日本地図や県別地図を白紙の紙に書き始めた。都市や山、川なども書き加え、手製の地図を作成した。初フライトは、大学3年の就職活動のときで遅かつたが、プロペラ機のYS11。眼下には日本地図が広がっており、目が離せなかった。

新型コロナウイルスの影響で、出張はしばらくお休みだが、私の仕事の半分近くは出張で、そのまた半分近くは飛行機を使う。列車の車窓から見る山の名著には『車窓の山旅 中央線から見える山』や『車窓展望の山旅』などあるのに、なぜ飛行機から見える山の本はないのだろう、と以前から思っていた。

「バスの窓から見える景色は映画のようだけれども映画の料金は取られない」とは本書の巻頭に書かれた文章であるが、飛行機も同様である。今やネットで衛星画像は見る事ができるし、TVの旅番組でドローンからの空撮が頻繁に出てくるご時世ではあるが、本書は定期便の機窓から撮影された236枚の美しい名峰の写真が主人公だ。著者は通産省工業技術院地質調査所に勤務する研究者で、登山者の視点から書かれたものでは

ない。出版社も航空雑誌を発行する出版社である。

写真中にはアルファベット記号がふられ、写真下には撮影年月、搭乗路線名、座席の左右の別、どの方向から撮影したかを示す16方位記号が示され、写真中のアルファベットごとに山名、標高が記載されており、富士山を筆頭にあとは北から南に掲載されている。それぞれの山の成り立ちや地質など専門家らしい解説も随所に見られる。

また、撮影余話として機窓から撮る苦労話が語られている。「山の写真が撮れるかどうかは運次第」、天候だけではない。LCCが

低価で予約できるようになったとはいえ、翼やエンジンよりも前の席の座席指定は有料、窓ガラスが綺麗かどうか、気象条件や飛行機の込み具合により飛ぶルートは日々変わる。空港近くでは風向きにより離着陸の方向も異なる。強敵の窓ガラスの反射を避けるため黒い布を当てての撮影。

空から見下ろす山の姿には、地上からとはまた違った美しさがある。機窓から見える山の風景をぜひお楽しみいただければ。

では、良きフライトを！

(木根康行)



**令和2年度第1回(4月度)理事会  
議事録**

日時 令和2年4月15日(水) 17時  
00分～19時00分  
場所 集会所+オンライン(zoom)

【出席者】古野会長、山本・坂井各

副会長、永田・萩原・古川  
各常務理事、安井・清登・  
清水・飯田・柏・近藤各理  
事、石川監事

【欠席者】野澤副会長、神尾理事、  
黒川監事

【オブザーバー】節田会報編集人

**【審議事項】**

- 1・新型コロナウイルス対応による令和2年度4～6月の初年度年会費の減額処理について審議した。(賛成1名、反対12名で否決)(永田)
- 2・特定資産(固定資産)の取り崩し処理の承認について審議した。(賛成12名、反対なしで承認)(古川)
- 3・波多野理事退任に伴う委員会担当理事の就任案について審議した。(賛成12名、反対なしで承認)(古野)
- 4・埼玉支部長の交代について審議した。(賛成12名、反対なしで承認)(永田)

**【協議事項】**

- 1・新型コロナウイルス感染防止に伴う対応および影響について討議した。(古野)

**【報告事項】**

- 1・28名の正会員と28名の準会員の入会を承認した旨、報告があった。(古野)
- 2・1件の寄附金の事前申請および2件の寄附金受入について報告があった。(古川)

- 3・2020年度特別事業補助金審査結果の報告があった。(坂井)
- 4・山研運営委員会の業務報告があった。(安井)
- 5・国土地理院WGの業務報告があった。(安井)

- 6・職員への雇用調整助成金の申請について経過報告があった。(近藤)
- 7・令和2年度4月開催予定の評議員懇談会を中止する旨の報告があった。(永田)

- 8・東京多摩支部からの準会員規程の修正依頼があった。(永田)
- 9・会報「山」4月号の発行について報告があった。(節田)

**ルーム誌 4月**

7日 常務理事会  
15日 理事会

4月来室者 15名

**会員異動**

**物故**

都甲 豈好(12057) 20・4・4  
福山 侑(13936) 19・7・24

**退会**

須田麻記子(11863)  
若山暢子(12130) 岐阜

酒井 広 (12855) 東海  
 湯沢幸一 (12954)  
 北村俊之 (13827) 東海  
 三宅清和 (13540) 北九州  
 中本 博 (15315) 広島

I N F  
O R M

インフォメーション

A O I N

藤谷百合子 (15509) 広島  
 志茂龍章 (15726) 広島  
 野崎 実 (16165) 信濃  
 笹倉知子 (A0111) 無所属  
 大根菜津美 (A0152) 東京多摩

山行と講習会の中止について

山行委員会

山行委員会の山行と講習会に参加ご希望の皆様、残念ながら新型コロナウイルス感染症対策のため左記の山行、講習会を中止いたします。ウイルスの感染状況、感染防止対策(三密状態解消)、山小屋の営業中止などの状況、地元の方々の意向などを鑑みて中止を決定しました。

①「南八ヶ岳縦走」(6月13日〜15日)

②「救急救助講習」(6月28日)

◆大杉谷溪谷から大台ヶ原山

山行委員会

宮川上流の大杉谷溪谷を登って大台ヶ原山の日出ヶ岳まで登ります。澄み切った美しい川や大迫力の滝、モスフォレストなど、水辺の美しさを楽しむことができます。谷沿いの栈道状の道を歩きます。日本一の多雨地帯ですので雨具とヘルメット必携です。ただし、新型コロナウイルスの影響により延期あるいは中止の場合があります。

期日 7月10日(金)、11日(土)  
 集合 JR 紀勢線三瀬谷駅 10時  
 15分

行程 7月10日(金)道の駅奥伊勢お  
 おだい10時30分―大杉溪  
 谷登山口14時―(溪谷歩き)

―桃ノ木山の家17時(泊)  
 7月11日(土)桃ノ木山の家7  
 時―日出ヶ岳14時 大台  
 ヶ原山駐車場解散(14時30  
 分と15時30分発の近鉄大  
 和上市駅行きのバスに乗  
 れます)。

募集 10名

参加費 1万5000円(宿泊費、

11日弁当、行きのバス代、

事務費、保険)

申込み 6月25日(木)までに氏名、

性別、住所、自宅電話番号、

携帯電話番号、緊急連先

(氏名と続柄)明記の上、左

記に申込み。

✉sanko@jac.or.jp

FAX 03-6886-4392

山行委員会 征矢三樹宛

訂正

「会報」4月号(899号)、会員異動の「吉部恵里(A0128)」とあるのは「吉部恵理(A0128)」広島」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。



◆編集後記◆

●今月号11ページに、熊崎和宏会  
 員が追悼記事を書かれています。磯野剛太会員が亡くなりました。まだ66歳で、日本山岳ガイド協会や全国山の日協議会の理事長を務められ、八面六臂の活躍をされていた最中の訃報でした。両団体とも変革期に差し掛かっていただけに、早過ぎる死が惜しまれます。●磯野さんとは旧知の間柄でしたが、特に深くお付き合いしたのは、トムラウシ山遭難事故調査特別委員会です。彼独特のソフトな語り口で粘り強く口説かれ、座長を命じられて関係者の聞き取りと報告書執筆に忙殺されました。それでも、その間隙を縫ってたびたびお酒を呑みましたが、実は一度も一緒に山へ行っていないのです。それだけが心残りです。(節田重節)

日本山岳会会報 山 900号

2020年(令和2年)5月20日発行  
 発行所 公益社団法人日本山岳会  
 〒102-0081  
 東京都千代田区四番町5-4  
 サンビューハイツ四番町  
 TEL 東京(03)3261-4433  
 FAX 東京(03)3261-4441  
 発行者 日本山岳会会長 古野 淳  
 編集人 節田重節  
 E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp  
 印刷 株式会社 双陽社